

ブラジル人集住地域のリングフランカ —群馬県大泉町と三重県伊賀市の比較—

齋藤 敬太

1. はじめに

外国人集住地域である群馬県大泉町と三重県伊賀市には、ブラジル人を始め、ペルー人、イラン人、中国人、フィリピン人、インドネシア人やネパール人などの様々な国籍、様々な母語を持つ外国人住民が多数存在する。当然日本人も住んでいる。このような状況の中で、彼らはリングフランカ（共通言語）としてどのような言語を用いているのだろうか。本稿では、両都市におけるリングフランカを看板や張り紙等の言語景観から見る「文字言語」と、住民同士の会話から見る「音声言語」の二つの側面から考察していく。

リングフランカとは、本来母語の異なる者同士の対話に使用される言語について指す語である。しかし、本稿で対象とする言語景観においてもその表示を書いて掲げた送り手、表示を読む受け手が存在し、話しことばと同様にそこには送り手と受け手の一種のコミュニケーションが発生している。そこで、本稿ではリングフランカという語は言語景観における文字言語についても適用可能であると考え。なお、今回「文字言語としてのリングフランカ」で紹介するのは、齋藤・志喜屋(2014)で取り上げたものである。

2. 大泉町と伊賀市

大泉町は、群馬県東部、埼玉県との県境に位置する都市である（図1左）。面積は県内最小だが、人口は町としては県内最多の約40,000人を擁している。その内約6,000人、国籍にして46ヶ国¹の外国人がおり、約4,000人のブラジル人を中心に、ペルー人・中国人・フィリピン人・ボリビア人などが居住している。外国人比率は約15%と全国で最も高い。その背景には富士重工や三洋電機（現パナソニック）といった企業の工場の存在がある。1980年台の好景気の時期、全国的に労働者不足となっていたが、大泉町も例外ではなかった。入管法改正に前後する1989年12月に町内の中小企業を中心となり「東毛地区雇用安定促進協議会」を結成、合法的かつ安定雇用の出来る日系ブラジル人の受け入れを始めた（協議会は1999年に解散）。

伊賀市は、三重県北西部に位置する都市である（図1右）。人口は約100,000人で、外国人は38ヶ国²から約4,200人がやって来て居住しており、外国人比率にして約4%である。約2,000人のブラジル人を中心に、中国人・ペルー人・韓国人・ベトナム人・タイ人などが居住している。

¹ 大泉町観光協会での聞き取り調査より

² 伊賀市役所での聞き取り調査より

伊賀市は旧上野市を中心とした1市3町2村が2004年に合併し成立した。旧上野市は製造業を中心とした企業が多く存在するため外国人比率は県内でも高く³、伊賀市はそれを引き継ぐ形となる。

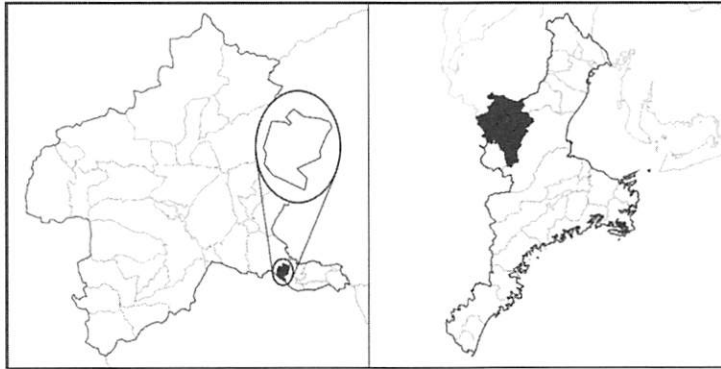


図1. 大泉町（左）と伊賀市（右）の位置

大泉町と伊賀市の外国人の国籍別割合⁴を示すと図2のようになる。

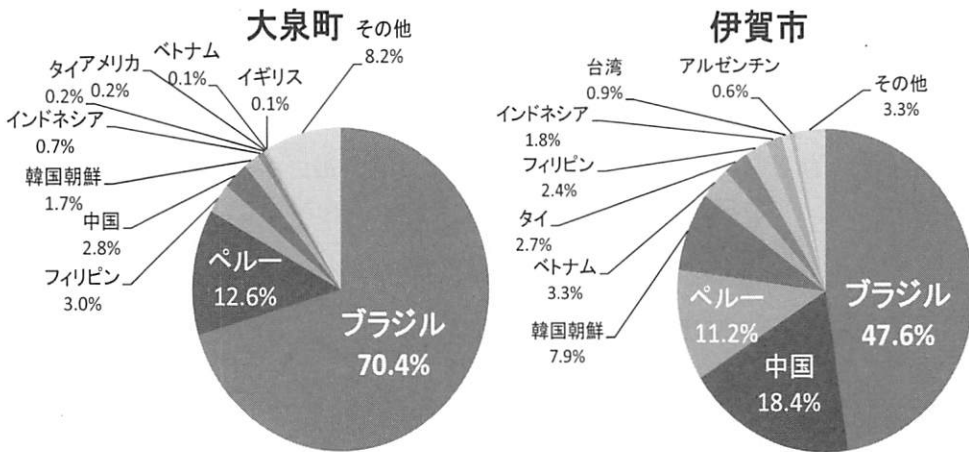


図2. 大泉町（左）と伊賀市（右）の外国人の国籍別割合

図から分かるように、同じ外国人集住地域とはいえ、その国籍別の構成比率は異なる。大泉町は外国人住民のブラジル人率は70.4%であるのに対し、伊賀市は47.8%で

³ 三重県(作成年不明)より

⁴ 大泉町(2010)及び伊賀市(2013)を参照し、上位10ヶ国を示した。ただし、伊賀市のデータは大泉町に合わせて韓国と朝鮮を合算したため、伊賀市(2013)で11位とされるアルゼンチンが10位となっている。

あり、ブラジル人の占める割合が倍近く違う。また、両都市の周辺に目を向けると、外国人集住都市会議加盟都市全 26 都市の分布は、その 8 割近くの 20 都市が伊賀市のある東海地方に密集して位置している一方、大泉町の位置する関東地方には同じ群馬県内に 3 都市あるのみである⁵。ブラジル人人口にしても、東海地方では 98,263 人が居住しているが、関東地方では 36,914 人⁶である。大泉町と伊賀市は、近隣に似たようなブラジル人集住地域がどれだけ分布しているかという状況も異なっている。また、斎藤・志喜屋(2014)で明らかにしたように、大泉町で見られる看板などの表示は、伊賀市などの他の外国人集住地域に比べてポルトガル語使用率が非常に高い。これらのような差は、両都市のリングフランカにも表れるのではないだろうか。

伊賀市については、ロング(2011)がリングフランカとしての日本語の存在を指摘しているが、大泉町でのリングフランカについて取り上げたものは管見の限り見当たらない。

本稿ではロング(2011)の内容をふまえ、伊賀市の状況を改めて確認するとともに、大泉町と比較しながら分析を深める。

3. 調査時期・調査方法

筆者は 2013 年 1 月・2 月・5 月・11 月及び 2014 年 8 月に大泉町、2012 年 10 月及び 2013 年 8 月に伊賀市をそれぞれ訪問した。文字言語については、両都市にある店舗の店頭及び店内における表示について調査した。音声言語については、外国人住民の出入りの多い「店」と「教会」で参与観察を行い、そこで使用される音声言語の実態について調査した。

4. 文字言語

初めに、大泉町と伊賀市における文字言語としてのリングフランカについて見る。文字言語としては、両都市の店にある看板や張り紙、値札などの表示を対象とする。外国人住民の多く居住する両都市で、外国人住民に対して各店ではどのような言語を用いて表示を掲げているのだろうか。

4.1. 大泉町

大泉町は、日本国内の町であっても必ずしも日本語がリングフランカとして使われるとは限らないということを示す好例である。筆者が 2013 年 1 月・2 月に大泉町を訪れた際にまず目についたのが、下車駅近くの八百屋の店頭に並んでいたポルトガル語表示である(図 3)。

⁵ 但し、外国人集住都市会議加盟都市でなくても、茨城県常総市や神奈川県愛川町のようにブラジル人集住地域は存在する。

⁶ 総務省統計局(2014)の「都道府県別 国籍・地域別 在留外国人」より



図3. 日本人経営の八百屋におけるポルトガル語表示 (大泉町)

日本語は無くポルトガル語 1 言語のみの表示なのである。経営者は日本人だが、単語レベルのポルトガル語は習得しているようで、ブラジル人購買客に分かりやすいようにポルトガル語表示を出しているものと考えられる。もちろん日本人購買客もいるのだが、外国人比率約 15%であるこの町で、外国人を購買客として取り込むことは店にとってもメリットは小さくないはずである。表示に不慣れな点が確認出来るところに、なんとかしてポルトガル語表示を出そうという努力が見られる。このように、日本人から外国人（ポルトガル語話者）へ表示される文字言語として、ポルトガル語が用いられているのである。

また、2013 年 11 月に大泉町を訪れた際は、トルコ人経営の輸入品店でもポルトガル語表示を確認することが出来た (図 4)。



図4. トルコ人経営の輸入品店におけるポルトガル語表示 (大泉町)

“HORÁRIO DE ATENDIMENTO”とあり、これは「営業時間」を意味する。ブラジル料理店を営む元ブラジル国籍のRH氏（現在は日本に帰化）によると、この店の経営者であるトルコ人は、ブラジル人の経営する店に度々出入りをしており、ポルトガル語を習得しているということで、このことが理由の一つであろう。大泉町において外国人の中でも少数派となるトルコ人は、普段の生活の場で多数派であるブラジル人に接触する機会が多い。経営者本人がブラジル人の店に出入りすることもあれば、トルコ人の店に出入りする客にも一定数のブラジル人が存在すると考えられる。そのため、自らの店に出入りをするブラジル人客を受け手に想定したポルトガル語表示が現れたのではないだろうか。外国人（ポルトガル語以外の外国語話者）から外国人（ポルトガル語話者）へ表示される文字言語としても、ポルトガル語が採用されている状況が大泉町には存在するのである。

このように、大泉町にある店舗では、ブラジル人経営者の店はもちろんのこと、日本人経営者やその他の外国人経営者の店でもポルトガル語表示を容易に観察することが可能である。これは、ポルトガル語が大泉町におけるリングフランカとして機能していると考えられる根拠となり得る。

但し、大泉町の文字言語におけるリングフランカは、ポルトガル語のみというわけでもなさそうである。2014年8月に大泉町を訪れた際に、ブラジル人以外にもペルー人やトルコ人などが参加するイベントが開催されていた。このイベント会場には、ゴミ箱として大きな段ボール箱（図5）が用意されており、そこには捨ててよいものが書かれていた。“LATAS”（缶）と“LIXO”（ごみ、くず）はポルトガル語表示である。ここでは、“CAN”、“GOMI”、“PET”の3語について考える。



図5. ポルトガル語表示とリングフランカ日本語の表示（大泉町）

まず、“GOMI”は日本語の「ごみ」であることは疑いの余地もないだろう。次に“CAN”であるが、その綴りから日本語ではなく英語からではないかと思われるかもしれない。しかし、日本国内でも英語を意識したわけでもなくとも「缶」を“CAN”と表記したものが多数あり、どこでも容易に見られる(図6)。そのため、日本語を経由して使われるようになったと判断することが妥当であろう。その意味ではこれらをリンガフランカ日本語の一つと考えることが可能である。

同様に、“PET”に関してだが、日本語では「ペットボトル」だけでなく「PET ボトル」という表記もよく見られ、ペットボトル本体には「PET ボトル」と表記される(図7)。“CAN”や“GOMI”とは異なり2つの表示がないため、日本語なのかポルトガル語なのか判別が難しい。大泉町のブラジル人住民2名に確認したところ、“garrafa PET”というポルトガル語が話しことばにおいて存在するという事なので、これはポルトガル語と日本語共に“PET”で通じるということで表示が1つのみになったと考えられる。但し、一方でこの語は書きことばよりも話しことばとして定着している様子も見られた。1994年来日した元ブラジル国籍の男性のRH氏はスペルを“garrafa PETI”とし、1999年来日したブラジル人男性のLO氏は“garrafa PET”とするもスペルに確信を持っていないようであった。“PETI”と“PET”のどちらもポルトガル語の発音としては[peʃi]となるため、単につづりの違いであり、話しことばでは全く違いがないことになる。

これらの単語は日本での生活でよく聞くものであり、重松(2012)などで言われる「デカセギ語⁷」のように彼らのポルトガル語の中にも取り入れられている可能性も予想される。RH氏によると、相手にもよるがポルトガル語に“can”や“gomi”を混ぜて用いることもあるということである。ポルトガル語に混ぜて使用するほどよく聞きよく使う語であるということは、他の外国人住民もよく聞く語であり、そのためこのような単語レベルにおいては日本語もリンガフランカとして機能していると考えられる。



図6. 缶を“CAN”と表記するゴミ箱(東京都府中市)



図7. 「PET ボトル」の表示

⁷ 重松(2012)p.64

4.2. 伊賀市

2012年10月及び2013年8月に伊賀市を訪れたが、伊賀市ではブラジル人が発信者である表示においてポルトガル語が見られた。また、ポルトガル語表示のみではなく日本語表示も見ることが出来た。図8は、伊賀市内にあるブラジル人とタイ人のカップルが経営する居酒屋で見られた、日本語とポルトガル語の2言語表示である。

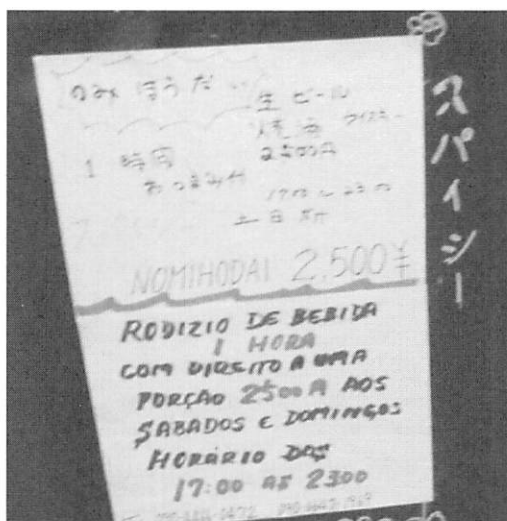


図8. 外国人による日本語表示が見られる表示 (伊賀市)

この店で実施している飲み放題のコースに関する内容を説明している。ここにはブラジル人はもちろん、日本人やタイ人なども訪れている。この日本語表示は、ポルトガル語を解さない日本人や、タイ人などのポルトガル語話者ではない外国人のための表示であると考えられる。その意味でこの日本語はリンガフランカとして機能していると解することが出来よう。

また、図9は牛肉や鶏肉などの料理について載せたものである。このメニューでは、「タイ」(魚名)「カラアゲ」「ヤク」のみが日本語で表記されている。「カラアゲ」と「ヤク」に関しては、それぞれ“frita”、“assado”の日本語訳として書かれている。「ヤク」については動詞の終止形であり、「カラアゲ」と並べるには不釣り合いであるが、これと同じ「ヤク」が見られる表示についてロング・今村(2012)では「伊賀上野在住のブラジル人やタイ人(の少なくとも一部)の住民の間で「ヤク」は活用される動詞ではなく、名詞として使われているのである⁸」と中間言語的特徴について言及している。このメニューは上記3語以外全てポルトガル語表示であるため、ポルトガル語を解さない者はこの語とイラストのみが判断材料となる。その意味では、この(中間言

⁸ ロング・今村(2012)p.157

語的な) 日本語表示もポルトガル語を解さない日本人や他の外国人に対するリングフランカとして使用している例と考えられる。

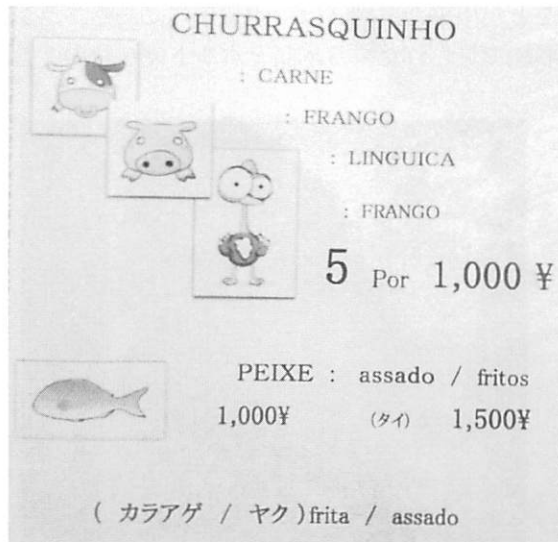


図9. 中間言語的な日本語表示 (伊賀市)

5. 音声言語

次に、大泉町と伊賀市で聞くことが出来る話しことば、つまり音声言語におけるリングフランカについて見ていく。こちらに関しては、「店」と「教会」という二つの場面に分けて記述することにする。多くの母語の異なる者同士が集まり、会話をするという場面がリングフランカの使用場面であるため、両都市において複数の母語の異なる外国人住民が集まる飲食店及び教会において参与観察を実施した。

5.1. 店内の参与観察

音声言語については、まず両都市における「店」で聞かれるものについて記述する。筆者は2013年1月・2月・5月・11月及び2014年8月に大泉町、2012年10月及び2013年8月に伊賀市を訪問し、両都市の飲食店内における使用音声言語に関する参与観察調査を実施した。その結果、母語の異なる外国人住民が集まる飲食店などにおいて、彼らが会話をする際に使用する話しことば、つまり音声言語におけるリングフランカの実態を見ることが出来た。

5.1.1. 大泉町

大泉町のとあるブラジル料理店では、ブラジル人男性の経営者及び複数のブラジル人店員が働いている。筆者はそのレストランに2013年1月・2月・5月・11月、2014年8月の複数回にわたり訪れて通っているが、ここでは少数の日本人客を除き、ほぼ

全ての客がポルトガル語で話していた。筆者の飲食中も店の中では常にポルトガル語が飛び交っていた。経営者や店員の何人かは日本語を話すことが可能であるため、日本人客に対しては日本語で対応することが可能である。日系人の集住地域なので顔つきだけでは日本語母語話者なのかポルトガル語母語話者なのかは判断出来ないであろうが、筆者が初めてこの店を訪れた際も、初めて目にした顔であることや、日本語を使用していたというところから判断したのであろうか、すぐに日本語で対応した。それでは、ポルトガル語を話しているその他の飲食客は全てブラジル人なのかと言うと、それはまた違う。経営者の話によると、来店客はやはりブラジル人が多いが、他にもペルー・ボリビア・アルゼンチン・イラン・トルコなどといったポルトガル語を母語としない多くの他の外国人も頻繁に飲食客として来店しているということである。そして、注目すべき点は、その際に使用される言語は日本語でも英語でもなく、ポルトガル語であるということである。ペルーなどのスペイン語話者が言語的に近縁に当たるポルトガル語を自然習得したということはある程度想像出来ることであるが、ペルシア語やトルコ語といった、より言語的に遠い言語の話者までがポルトガル語を習得しているということは大変興味深い。

また、2014年1月に大泉町を訪れた際には、西小泉駅付近にある日本人の経営する八百屋にブラジル人の客が買い物にやってくる光景を見た。そこでは、日本人女性がブラジル人女性の購買客に対して片言のポルトガル語を日本語の中に混ぜて用いながら、世間話や商品の説明などの会話をしていた。

同じく2014年1月、西小泉駅より国道354号線を西に進んだところにあるリサイクルショップを訪れた。この店の前に立っていた外国人住民はポルトガル語で会話をしていた。この店の店員である女性は、日系アルゼンチン人であるが、彼女の話によると、大泉町で自然とポルトガル語を覚えたということである。その言葉通り、やって来た外国人客にポルトガル語で対応をしていた。

このように、大泉町の店内では、文字言語において確認されたのみならず、話しことばにおいてもリングフランカとして主にポルトガル語が用いられるということを知ることが出来た。

5.1.2. 伊賀市

一方、伊賀市の場合はどうであろうか。伊賀市内にあるブラジル人経営のとある居酒屋は、ブラジル人男性がタイ人女性のパートナーと共に経営している。二人の間では、共通言語としてポルトガル語でもタイ語でもなく、また英語でもなく日本語が使用されていた。この居酒屋にはブラジル人が多く訪れるものの、タイ人や日本人などもやってくる。この居酒屋には2012年10月及び2013年8月に複数回訪れたが、ブラジル人経営者はブラジル人が飲食に訪れた場合はポルトガル語を用いて対応し、タイ人などそれ以外の場合は全て日本語で対応していた。パートナーであるタイ人女性は相手がタイ人の場合はタイ語、それ以外は日本語を用いていた。2012年10月に訪れた際は、住民ではないものの、アメリカ人・中国人・インドネシア人も訪れた。その

際においても、ブラジル人経営者及びタイ人パートナーはアメリカ人に対しても、中国人に対しても、インドネシア人に対しても常に日本語を用いて会話をしていた。

また、同じく 2012 年 10 月に、伊賀市にある日本人が経営する多国籍料理店に訪れた際は、日本・ペルー・中国・インドネシアといった多国籍の飲食客が訪れたが、そこでも全員が日本語を使用して会話をしていた。日本人が会話に入っている時は勿論のこと、ペルー人と中国人、中国人とインドネシア人といったように、間に日本人が一切入っていない場合でも同じように日本語を使用し、お互いの母語や、英語やポルトガル語といった言語を使用するという事は一切見られなかった。

このように、伊賀市では、やはり文字言語の場合と同様、店内における話しことばにおいても大泉町とは異なり、リングフランカとして日本語の存在が確認された。

5.2. 教会内の参与観察

次に、両都市での「教会」について記す。キリスト教徒が多い中南米出身者が多く居住する外国人集住地域には、教会が存在していることが多い。そしてこのような外国人の多く住む地域にある教会は、中南米出身者に限らずそこに住む外国人住民（あるいは日本人住民も）の交流や情報交換の場としても機能している。筆者は 2013 年 2 月・5 月及び 2014 年 8 月に大泉町、2012 年 10 月に伊賀市の教会をそれぞれ訪問し、両教会の礼拝及びミサに参加した。そこで、牧師や神父を始めとして、参加者がどの言語を用いて他の参加者と会話をしているか、教会内における使用言語に関する参与観察調査を実施した。

5.2.1. 大泉町

2013 年 2 月初旬、大泉町内で知り合った 60 代ブラジル人女性の誘いで、とある教会の礼拝に参加した。礼拝の参加者の多くはブラジル人であるが、他にもスペイン語圏の南米人や、キリスト教に改宗したというトルコ人も参加していた。このトルコ人男性は、1 年でポルトガル語が話せるようになったようで、ブラジル人女性と結婚していた。夫婦で交わされる言語はポルトガル語であった。牧師を始め参加者たちは筆者を温かく迎えてくれ、日本語で話しかけてくれ、礼拝中は 20 代ブラジル人男性が筆者の隣で日本語通訳を担当してくれた。しかし、筆者に話しかけた場合以外は牧師の話も礼拝前後の雑談も皆が全てポルトガル語で話していた。スペイン語母語話者も、トルコ語母語話者もポルトガル語を習得しているという状況である。筆者に話しかける際も、皆が日本語を流暢に操れるわけではなく、片言の日本語の者もいた。なお、教会内のお知らせ等も全てポルトガル語であった。この教会には以降 2013 年 2 月下旬・5 月・2014 年 8 月にも訪れたが、いずれも筆者に話しかける場合以外ほどの参加者も基本的にポルトガル語のみを使用していた。

大泉町においては、教会内でもポルトガル語をリングフランカとして使用する環境が形成されているのである。

5.2.2. 伊賀市

一方、伊賀市はどうであろうか。筆者は、2012年10月に伊賀市内のとある教会のミサに参加した。参加者は、ブラジル人・ペルー人・フィリピン人・そして日本人などであった。神父は日系アメリカ人で、当日の説教は英語によるものであったが、週によってスペイン語、ポルトガル語、英語、日本語で行われるそうである。参加者は同じ母語同士の場合を除いては、基本的にはポルトガル語や英語ではなく、主に日本語を用いて雑談などをしていた。初めて参加した筆者を温かく迎えてくれ、参加者は皆日本語で話しかけてくれた。なお、教会内のお知らせ等は日本語・英語・ポルトガル語など多言語によるものが確認された。

伊賀市では、店内の場合と同様に、教会内においても外国人同士の共通言語、つまりリングフランカとして、日本語が使用される環境になっているということが出来るのである。

6. まとめ

以上、大泉町と伊賀市の文字言語及び音声言語におけるリングフランカについて見てきた。

まず、文字言語について、リングフランカとして使用される言語の状況を送り手と受け手によって示したものが以下の表1と表2である。大泉町については表1、伊賀市については表2のように示すことが出来る。白くなるにつれて日本語、黒くなるにつれてポルトガル語の使用度が増すイメージを示している。

表1. 大泉町での文字言語におけるリングフランカ

		受け手		
		日本語話者	他の外国語話者	ポルトガル語話者
送り手	日本語話者			
	他の外国語話者			
	ポルトガル語話者			

表2. 伊賀市での文字言語におけるリングフランカ

		受け手		
		日本語話者	他の外国語話者	ポルトガル語話者
送り手	日本語話者			
	他の外国語話者			
	ポルトガル語話者			

表のように、大泉町はポルトガル語話者でなくても、日本語話者やポルトガル語以外の外国語話者もポルトガル語による情報発信を試みているという環境であるため、

ブラジル人にとっては日本語を覚えるというよりもポルトガル語による生活がしやすい言語環境が出来ていると考えられる。

このような大泉町と比較すると、伊賀市ではポルトガル語話者であるブラジル人などの外国人が日本語表示を出そうとしており、(少なくとも今回の調査では)日本人によるポルトガル語の使用が見られないという対照的な点が明らかとなった。ブラジル人はポルトガル語話者以外の住民に対しては日本語を身に付けて発信する言語環境であると考えることが可能である。

音声言語におけるリンガフランカに関しては、大泉町の店内ではポルトガル語、伊賀市の店内では日本語の使用が優勢であることが確認された。筆者の参与観察から、大泉町のブラジル料理店、伊賀市の居酒屋のリンガフランカの使用状況を図にしたものが図10である。なお、図はロング・今村(2013)を参考にした。

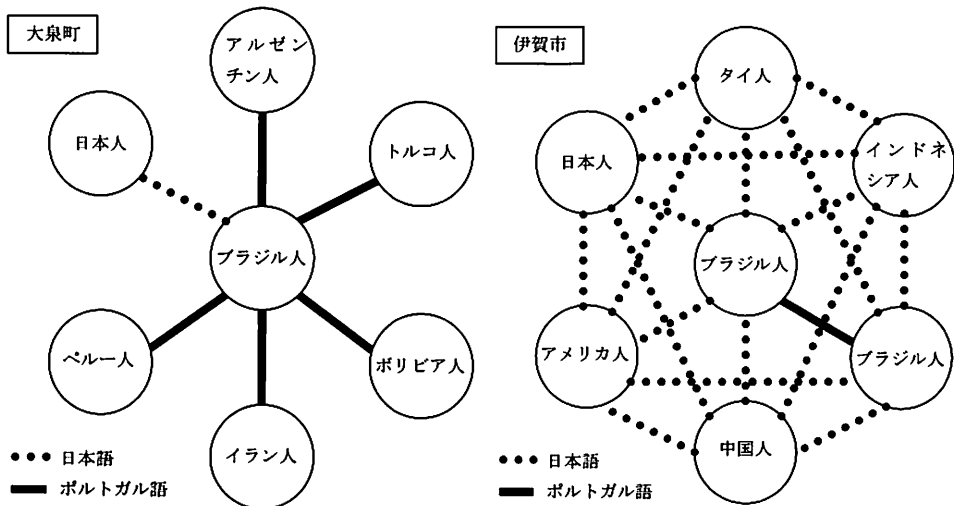


図10. 大泉町と伊賀市の店内での使用言語

筆者が確認していない組み合わせではどの言語によって会話がされるのかは図には記さなかったが、少なくとも、どちらも同じように多くの母語が異なる者が絡み合っているにもかかわらず、リンガフランカとしてポルトガル語が優勢か、日本語が優勢かということは一目で分かる。

店内の場合と同じように、大泉町の教会ではポルトガル語、伊賀市の教会では日本語の使用が優勢であることが確認された。今回の教会での参与観察の結果を図に示したものが図11である。

ブラジル人集住地域のリンガフランカ

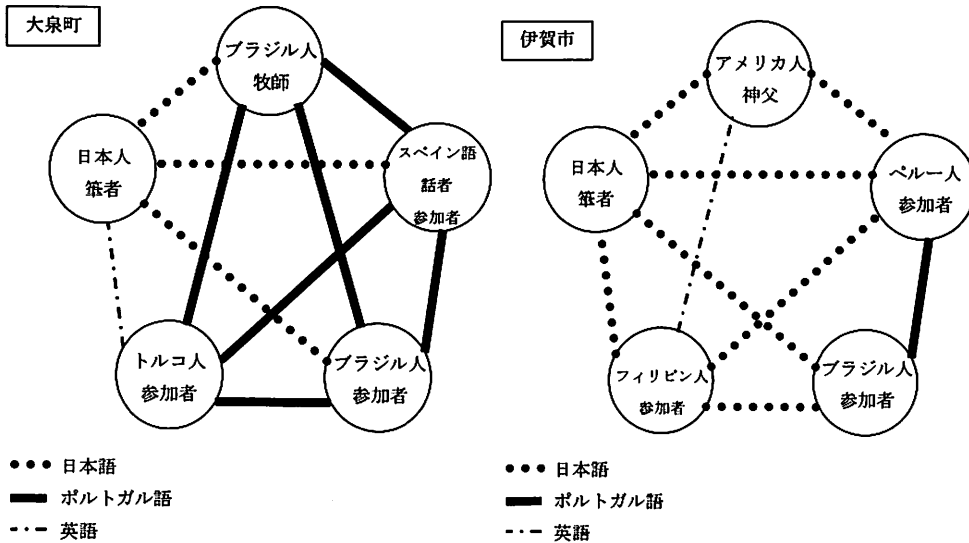


図11. 大泉町と伊賀市の教会での使用言語

大泉町のトルコ人と筆者は英語を使用したことになっているが、お互いに英語で挨拶を交わした程度で、その意味では彼がどれほど英語を使用出来るかは定かではない。但し、日本国内で日本人である筆者と、簡単な挨拶程度にも関わらず日本語を使用しなかったという点、そしてその反面ブラジル人やスペイン語母語話者とポルトガル語では会話が可能であるという点が、大泉町におけるポルトガル語の存在感を強く感じさせる。

伊賀市においては、ブラジル人とペルー人のポルトガル語、ペルー人同士のスペイン語、アメリカ人とフィリピン人の英語という場合以外は、筆者の確認した限りでは全て日本語であった。大泉町とは異なり、それぞれの外国人住民に日本語を使用する場面があったことになる。

しかし、大泉町のポルトガル語の中にも、語彙レベルでは日本語が臨時借用語として採用されており、ブラジル人同士の会話でもそのような日本語が確認された。ブラジル人が経営する食品店でのブラジル人同士のポルトガル語会話の中や、牧師の礼拝中のポルトガル語による話の中に「仕事」「会社」「社長」「出稼ぎ」「まあまあ」「勿体無い」「大丈夫」「だいたい」という語が臨時借用されていることを確認した。これは4.1でも触れた重松(2012)の「デカセギ語」の例として考えられ、在日ブラジル人にとって日本での使用頻度が高いもの、あるいはポルトガル語で言うよりも簡潔に表現出来るものが彼らのポルトガル語に取り入れられていると考えられる。

7. おわりに

本稿では、ブラジル人集住地域である大泉町と伊賀市の二都市におけるリンガフランカについて、文字言語と音声言語という二つの観点に分けて考察した。その結果、

文字言語においても音声言語においても、大泉町ではポルトガル語、伊賀市では日本語がリングフランカとして機能しているという実態を明らかにすることが出来た。伊賀市については、ロング(2011)が指摘したリングフランカとしての日本語の存在を再確認したということになる。また、大泉町におけるリングフランカとしてのポルトガル語の存在を明らかにした点は本稿の大きな意義と言える。大泉町においてポルトガル語が使用される要因として、やはり2章でも述べた外国人住民のブラジル人率や普段町中で目にするポルトガル語の多さが挙げられるであろう。また、大泉町と伊賀市の観光政策の差も影響していると思われるが、これについては稿を改めて述べたい。

語彙レベルにおいては、ポルトガルをリングフランカとする大泉町でも、文字言語・音声言語ともに日本語由来・日本語経由の「デカセギ語」あるいはそれに類するものが見られた。

今後、このような外国人集住地域におけるリングフランカを調査することによって、日本国内におけるリングフランカに選択される言語、そしていかにしてその言語が選択されるかが明らかとなる。そして、特にリングフランカとして日本語が選択される環境、またはどのような日本語由来・日本語経由の語彙が使用されやすいのかを明らかにすることは、外国人住民の日本語教育や日本語習得に貢献出来るであろう。

付記

本稿は、筆者の修士論文「言語環境と言語使用の関連に関する社会言語学的研究—日系ブラジル人集住コミュニティの大泉町と伊賀市の比較—」の第6章及び第7章を加筆・修正してまとめたものである。

謝辞

本研究は、井上史雄代表の文部科学省科学研究費『公共用語の地域差に関する社会言語学的総合研究』（基盤C）の助成を受けたものである。

また、調査に協力して下さった大泉町観光協会・大泉町役場・伊賀市役所の担当者の皆様、平松忠治 (Ricardo Hiramatsu) 氏、Antonio Hiramatsu 氏、Lincoln Okumoto 氏、Carolina Shikiya 氏、Eder Shirasu 氏、Fabio Sugui 氏にお礼申し上げます。

参考文献

- 伊賀市(2013)「伊賀市在住外国人の現状」伊賀市役所調査での配付物
大泉町(2010)「平成22年国勢調査人口等基本集計結果について」<http://www.town.oizumi-gunma.jp/01soshiki/06jyumin/02syokou/1321925300-60.html>
斎藤敬太、志喜屋カロリーナ(2014)「外国人集住地域の言語景観からみる多文化共生のあり方」多文化社会実践研究・全国フォーラム（第8回）口頭発表原稿（東京外国語大学、2014年12月）
重松由美(2012)「在日ブラジル人高校生・大学生の言語生活とアイデンティティ」『椋山女学園大学教育学部紀要』5 椋山女学園大学教育学部

ブラジル人集住地域のリンガフランカ

総務省統計局(2014)「統計表一覧」 http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&listID=000001127507&requestSender=dsearch
三重県(作成年不明)「外国人アドバイス事業実施にいたる背景—伊賀地域における外国人住民の現状—」 <http://www.pref.mie.lg.jp/gkenmin/hp/advicereport/PDF/1.pdf>
ロング, ダニエル(2011)「伊賀上野の外国人住民コミュニティの言語生活環境—参与観察調査からの中間報告—」『人文学報』443 東京都立大学人文学部
ロング, ダニエル、今村圭介(2012)「伊賀上野の多言語・多方言の言語景観」『日本語研究』32 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会
——(2013)『伊賀上野に見られる多言語環境』平成24年度科学研究費(基盤研究(B)(1))
「都市の地域中心性と敬語行動」(代表:中井精一)報告書 富山大学人文学部
日本語学研究室

(さいとう けいた・首都大学東京大学院博士後期課程)